

天然記念物 大賀の押被

「壮大な大地のうねり」

皆さんは高梁市が地質学研究所の宝庫であることをご存じですか。成羽町から川上町の一帯は、太古の記憶を留める成羽の化石層や枝地区の不整合、美しい渓谷美を見せる羽山溪や磐窟谷、滝壺跡が連なる藍坪など珍しい地



川底に現れた地層の境目

形や地質が見られることと知られており、明治時代から数多くの地質学者が訪れて優れた業績を残しました。今回紹介する大賀の押被もその一つです。

大賀の押被が目ざされたのは今から八五年前のことです。当時、

東京帝国大学（現東京

大学）の助教授であった小沢儀明は、山口県

秋吉台で古生代の地層が逆転しているのを発見しました。地層は、古い層の上に新しい層

が積み重なっていくのが一般的ですが、ここでは古い層の下に新しい層が見つかったのです。さらに東へ調査を進めた小沢は、川上郡

大賀村（現川上町仁賀）で古生代と中生代の地層が逆転していることを確認しました。そ

れは、約二億年前（中生代三疊紀）に堆積した黒い泥岩の上に約三億年前（古生代二疊紀）

の白い石灰岩が重なったもので、その境目が大竹川の川床に姿を現していたのです。小沢

はこれを大賀デッケンと名づけましたが、デッケンとは毛布を折りたたんだ状態を表すドイツ語です。横から強い圧力を受けた地層は

衣のひだのように押し曲げられます。これを褶曲と言いますが、この褶曲した地層が横倒



しになり、さらに一層強い圧力が加わると、古い地層が新しい地層の上に押し被さることとなつて、地層の逆転が起こるのです。こうして小沢は、地層の逆転を引き起こした大規模な造山活動によつて日本列島が形成されたことを明らかにし、大賀の押被はそのことを明瞭に指し示す場所として、昭和一二年、国の天然記念物に指定されました。

最近の研究によると、大賀の押被の規模は当初考えられたほど大きくはないようですが、それにしてもおよそ一億年前に日本列島をつくりあげた大地のうねりが、清らかな流れの底に、今もその片鱗をのぞかせているのです。

（高梁市文化財保護審議会委員 重見之雄さん、挿図の出典は「川上町の文化財」川上町教育委員会、二〇〇〇）

